
猫の鳴き声に導かれ

玲柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の鳴き声に導かれ

【Nコード】

N2579G

【作者名】

玲柚

【あらすじ】

ーいつもと同じ帰り道だけど今日は少し違う世界のようー

猫の鳴き声が聞こえた。

時刻は午後6時半あたり。私は住宅街の中を自転車で走っていた。家から学校までの距離が約10キロ。生憎と田舎に住んでいるので電車やバスも通っておらず、仕方無しの自転車登校。

長時間自転車に乗って疲れ気味だった私はゆっくりと漕ぎながら帰っていた。

そんなときに猫の鳴き声を聞いたのだった。

よく聞くのんびりした鳴き声では無く、少し尖った感じの威嚇するような声だった。どこにいいのか疑問に思い目を凝らしてみたが、姿は夕闇に紛れて見えなかった。

すると猫の声がまた聞こえた。先程と同じ短く鋭い声だった。けどやはり猫の姿は見当たらなかった。

曲がり角を右へ左へ。住宅街をくねくねと蛇のように抜け田んぼ道に出る。

道端で突っ立っていた黒と黄色のしましまが目の端に映る。私の頭の中で勇ましく虎が吠えた。

でこぼことした坂は山へと変わってサイクリングが始まる。登下校用のママチャリでサイクリングには不十分。しかも前カゴには教科書が詰まったかばんが乗っていた。けどそんなのは構わない。

薄暗い世界の中追いかけてくるもう一人の自分。必死に逃げていたらしいのまにか消えていた。

気が付くと目の前には見慣れたマイハウス。

いつものように我が家の犬が吠えてお出迎え。
私はホッと安心すると同時に、少しガツカリとした気持ちになりな
がら扉を開けた。

扉を閉める瞬間、猫の鳴き声が聞こえた気がした。

(後書き)

初めまして。この小説が初投稿の玲柚^{レイユウ}という者です。元は他のサイトに載せていた話を少しいじってこちらに持ってきました。この小説は自分の学校からの帰り道にあった出来事をモデルにしました。日常の何気ない瞬間が、あるきっかけによってふっと別世界に変わる。そんな不思議な感じを出したつもりです。まだまだ未熟なので評価や感想をバンバン貰えたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2579g/>

猫の鳴き声に導かれ

2011年1月4日00時54分発行